

「夏に観たい広重の名所絵と俳句」



歌川広重『名所江戸百景』 五十三. 大はしあたけの夕立 より

めぐり来る季節に合う名画と俳句、第五回目は前回に続き歌川広重（うたがわ ひろしげ）（1797-1858）の『名所江戸百景』から夏に観たい作品と俳句です。

美人画や役者絵では人気が出なかった広重。

しかし、ドイツ・ベルリンで生まれた「ペロ藍」と呼ばれたペルシアンブルーとの出会いが彼の運命を変えます。

木版画の特質をよく理解していた広重は、油彩より鮮やかな発色ができ、後に「広重ブルー」と呼ばれる紺青（ぐんじょう）の表現を名所絵に取り入れます。

大胆な構図とともに、欧米での評価が高く、印象派のゴッホが模写した作品など、今回は「夏に観たい広重の名所絵」五点を選びました。

俳句とともに楽しみ下さい。

1. 王子不動之瀧 (おうじふどうのたき)

『名所江戸百景』四十七



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_047.jpg

四十七. 王子不動之瀧 | 安政四年 (1857年) 九月

東京北区・王子にあった不動の滝です。
滝から発見された不動明王を滝の右手に祀っていたことが名の由来になっています。
石神井（しゃくじい）川にはいくつかの別名があり、このあたりは音無川と呼ばれ、そこから王子七滝と呼ばれた名主の滝、稲荷の滝、権現の滝、大工の滝、見晴の滝、不動の滝、弁天の滝が流れ落ちていました。
現在は、名主の滝だけが残り、公園となっています。

広重はこの滝をかなり高さのあるものとして描いていて、彼が残した浮世絵中、最大の滝です。
まっすぐに落ちる滝の中央には藍の拭きぼかしが入れられ、水流の勢いが感じられます。
滝の前には注連縄（しめなわ）が張られ、神々しさを強調しています。
この滝は病氣治癒の御利益（ごりやく）で知られ、滝浴（たきあ）みに向かう禪（ふんどし）姿の男性が描かれています。
滝浴みを終えたもう一人の男性が休憩していて、納涼場にもなっていたようです。
そこへ二人の女性が水しぶきを避けるためか傘を手にして涼みに来ています。
崖の上の杉や、滝の奥の岩場、水辺に面した地面、崖の下には雲母摺（きらざり）が施され、湿潤なこの場所の様子をよく伝えています。

ここでは晩夏の季語「滝浴（たきあび）」を詠んだ句を選びました。

滝浴びて来し山伏のひろき胸
皆川盤水（みながわ ばんすい）（1918-2010）

滝浴びの腹へこませて入りけり
松浦敬親（まつうら けいしん）（1948-）

2. 深川萬年橋 (ふかがわまんねんばし)

『名所江戸百景』五十二



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_051.jpg

五十二. 深川萬年橋 | 安政四年 (1857年) 十一月

東京江東区、隅田川へと合流する小名木川に架けられた万年橋の上、亀が紐でぶら下げられています。

なんとも奇抜な絵です。

実はこの亀、放し亀として、手桶の提げ手にぶら下げられています。

捕獲した生き物を野や川などに放すことで殺生（せつしょう）を戒める八月十五日に各地の神社仏閣で行われる放生会（ほうじょうえ）という宗教儀式があります。

そこで橋のたもとや池の端で、魚や亀、鳥を客たちに逃がさせるため、販売する者ものたちが現れるようになりました。

この亀も川に放たれることを望んでいるのですが、悪い亀売りに再び捕獲され、繰り返し売られてしまうのかも知れません。

「鶴は千年、亀はは万年」という諺から、広重は亀と万年橋を結びつけたのでしょう。

手桶の後ろに見える黒ずんだ木の杵は、万年橋の欄干。

その隙間から船頭の後ろ姿や川に多くの荷船が往来する様子が描かれています。

そして画面中央には丹沢山地の上に富士山が万年雪をいただいてどっしりと構えています。

亀は日が暮れつつある西の空を眺めているようです。

小さな亀を富士山より巨大に描く大胆な構図で、広重は命の尊さを表現したのでしょう。

ここでは三夏の季語「亀の子」を詠んだ句を選びました。

亀の子の桜田門に泳ぎつく

高橋とも子（たかはし ともこ）（1952-）

亀の子に城濠といふ余生かな（城濠＝しろぼり）

稲畑廣太郎（いなはた こうたろう）（1957-）

3. 大はしあたけの夕立 (おおはしあたけのゆうだち)

『名所江戸百景』五十三



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_055.jpg
 五十三. 大はしあたけの夕立 | 安政四年 (1857年) 九月

ゴッホがそっくり模写したことでも知られるこの作品は「江戸名所百景」を代表する一点です。ここに描かれた大橋とは、元禄六年（1693年）に隅田川に架けられた新大橋のことで、上流の両国橋の旧名が大橋だったので新大橋と呼ばれました。対岸は安宅（あたけ）と呼ばれた幕府の御舟蔵があり、将軍の御座船（ござぶね）や唐舟（からふね）などが繋がっていました。寛永十二年（1635年）に建造された巨大な豪華船安宅丸が繋がっていたので安宅が地名となりました。

突然降り出した夕立。

新大橋を渡っていた人々は、雨に濡れまいと足早に駆け抜けて行っています。

人々を急せた突然の驟雨（しゅうう）、女性の赤い蹴出（けだ）しがひとときわ鮮やかです。

雨は角度の異なる線を二枚の版木に彫り、それに濃淡のある墨を用いて摺ることで、奥行きと雨脚の強さを表現しています。

喧騒が聞こえてきそうな橋の上とは対照的に対岸の安宅は薄墨のシルエットで表現されていて、その様子はよく分かりません。

また、画面上部は不定形にぼやかされており、雨雲の不穏な動きが伝わってきます。

広重は名所を再現するというよりも、激しい夕立という天候そのものを描こうという意識が強かったのでしょう。

ここでは三夏の季語「夕立」を詠んだ句を選びました。

さっきから夕立の端にゐるらしき

飯島晴子（いじま はるこ）（1921-2000）

神宮の夕立去りて打撃戦

ねじめ正一（ねじめ しょういち）（1948-）

4. 逆井のわたし (さかさいのわたし)

『名所江戸百景』五十九



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_058.jpg

五十九. 逆井のわたし | 安政四年 (1857年) 二月

題名となっている逆井の渡しは中川で隔てられた江戸と下総（しもうさ、現在の千葉県北部）を繋ぐ交通の要でした。

逆井という地名は、江戸湾が満潮になると水がこのあたりまで逆流したことによります。

しかしながら、題名となっているにもかかわらず、肝心の逆井の渡しは、画面の右奥で小さく描かれているだけです。

数名の客を乗せた二艘の渡し船や船着き場、集落の建物の様子がかろうじてうかがえますが、広重の興味は人の営みにはありません。

広重が描こうとしたのは、豊かな水量を誇る中川の水の流れ、また、川に生える葦にたたずんだり、降り立とうとする白鷺たちです。

川の水面は摺師のテクニックによって美しいぼかし具合となっています。

白鷺の羽は線をへこませて摺る空摺という技法が用いられ、図版では分かりづらいですが、ふわふわとした羽の感覚を伝えようとしています。

水面の藍色、いわゆる広重ブルーと白鷺の白とが見事な対比を見せている一点です。

ここでは繁殖期が夏なので、三夏の季語になっている「白鷺」を詠んだ句を選びました。

白鷺の佇つとき細き草摺み（佇つ=たつ、摺み=つかみ）

長谷川かな女（はせがわ かなじょ）（1887-1969）

美しき距離白鷺が蝶に見ゆ

山口誓子（やまぐち せいし）（1901-1994）

5. 綾瀬川鐘か淵 (あやせがわかねがふち)

『名所江戸百景』七十



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_069.jpg

七十. 綾瀬川鐘か淵 | 安政四年 (1857年) 七月

鐘ヶ淵は隅田川上流の綾瀬川との合流地点のあたりを指します。
画面中央の奥の小さな橋が架かった川が綾瀬川で、隅田川との合流地点です。
ここより先は隅田川が荒川と名を変え、少し上流には千住大橋がありました。
鐘ヶ淵の地名の由来は、このあたりは川の合流点で流れが早く、善門院という寺が移転する時、鐘が川の淵に水没したことに由来しています。

合歓（ねむ）の花と葉が画面上半分いっぱい覆いかぶさるように描かれています。
薄紅色の花弁が版木に絵具をつけずに摺り、和紙に凹凸（おうとつ）をつける空摺で、立体的に表現されているので、まるで本物の花を間近に見ているかのように錯覚します。
水面には着物の柄がなかなか大胆な筏（いかだ）師の姿があり、棹を挿してしばし佇（たたず）んでいるようにも見えます。
筏師の左手に見えるのは、荷船の舳先でしょうか。
筏師の視線の先あたりに、一羽の白鷺が空を横切っています。
穏やかな夏の夕暮れです。
合歓の幹や手前の地面、筏、川の両岸にぼかしが入り、その上部の一字ぼかし、さらに合歓の幹に雲母摺が使われるなど、手の込んだ摺りになっています。

ここでは晩夏の季語「合歓の花」を詠んだ句を選びました。

虹飛んで来たるかといふ合歓の花

細見綾子（ほそみ あやこ）（1907-1997）

咲き垂るる合歓に触れつつ舟の竿（竿＝さお）

草間時彦（くさま ときひこ）（1920-2003）

私も詠んでみました。

夕立ちきてひとり夕餉の炸醬麵 (夕立ち=ゆだち、夕餉=ゆうげ、炸醬麵=じゃーじゃーめん)
白井芳雄

今回は「夏に観たい広重の名所絵と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：小池満紀子・池田芙美著
『広重 TOKYO：名所江戸百景』(講談社)(2017年)
ISBN978-4-06-220507-8

太田記念美術館監修 日野原健司・渡邊晃文
『広重 名所江戸百景』(美術出版社)(2017年)
ISBN978-4-568-10495-0 C3070

安村敏信監修
『広重「名所江戸百景」の旅 あの名作はどこから描かれたのか?』(平凡社)(2014年)
ISBN978-4-582-94568-3

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』(講談社)
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 夏』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621032-X C0392

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3F

TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com